

大学へのeポートフォリオ導入の目的と現状

-eポートフォリオ導入担当者へのアンケートから-

The Purpose and Current Situation of ePortfolio Implementation to University
-The Survey Using Questionnaire to ePortfolio Implementation Managers-

平岡齊士^{†1} 小村道昭^{†2} 久保田真一郎^{†3} 宮崎誠^{†1,†4} 松葉龍一^{†1}
Naoshi HIRAOKA, Michiaki OMURA, Shin-Ichiro KUBOTA, Makoto MIYAZAKI, Ryuichi MATSUBA,

熊本大学大学院^{†1}, (株)エミットジャパン^{†2}, 宮崎大学^{†3}, 畿央大学^{†4}
Kumamoto University, EMIT Japan Corporation, University of Miyazaki, Kio University

〈あらまし〉 大学へのeポートフォリオ導入の目的と現状を調査するために、大学へのeポートフォリオ導入担当者に対してウェブアンケートを実施した。その結果、eポートフォリオの目的は学習者の支援が多く、学習の対象は授業だけでなくインフォーマル学習も含まれるケースが多かった。一方で、多様な学習内容を記録させているものの振り返りの対象や公開の対象は限定的であった。導入担当者はeポートフォリオの導入に熱意を持って取り組んでいるが、周囲の理解や協力を得ることに苦心していることが伺われた。導入・運用ともに目標への途上にあり、継続の必要性が示唆された。

〈キーワード〉 eポートフォリオ, システム開発, 学習支援システム, 学生指導, 教育評価

1. 調査の内容・実施方法・回答者

大学におけるeポートフォリオ導入担当者に対して、eポートフォリオ導入の目的とその現状などについてのウェブアンケート調査を行った(時期は2015年5月)。ここでの導入とは単に商用eポートフォリオの導入のための事務処理等への関与などではなく、eポートフォリオの開発・設計や運用に関与したことを意味する。

回答者は大学へのeポートフォリオ導入担当に関わる16名であった。その多くは某ICT系研究会への参加者であり、ICTに関する知識や経験が豊富な者が大半であった。内訳は教員10名、研究員2名、職員1名、ベンダー1名、その他2名であった。回答者のeポートフォリオ導入に関する立場はeポートフォリオ導入全体の担当(11名)、eポートフォリオの設計担当(7名)、eポートフォリオを使うカリキュラムやプログラム(複数の科目)の設計担当(3名)、自分が担当する科目のeポートフォリオの設計(1名)、担当する科目で導入されたeポートフォリオの使用者(1名)、その他(1名)であった。

2. 結果

得られた回答のうち導入の目的、記録する情報、振り返りの対象、公開の範囲を表1-5に示した。またどのようにeポートフォリオ導入へ関与しているかについての自由記述を表6に示した。

3. 考察

回答から得られた最大公約数的なeポートフォリオ像は、学習者の学びの支援(学習指導、履修指導を含む)を目的とし、授業だけでなく学外での活動なども記録対象とするものであった。記録対象は授業での提出物、インフォーマルな学び・活動の情報、授業の成績や出席状況などの他、学習者自身の主体的な学び・振り返りなども含む。振り返り対象は「学習者のあらゆる学び」「1回ごとの授業」「1科目ごと」「複数科目」「カリキュラム全体」と多様であった。一方で記録対象で挙げられた数に比べて、個々の振り返り対象数が少なく、記録はしても振り返りまで繋げられていないことが示唆された。公開の範囲は「教員-学生間」「使用者の任意」が多く、広く公開することはほぼされていなかった。現状はeポートフォリオを導入し、学びを記録させるまでを達成しているが、振り返りや公開はこれからという段階と考えられる。また自由記述からは、導入担当者は熱意を持って取り組んでいるが、周囲の理解や協力を得ることに苦心している様子が伺われた。

調査により、eポートフォリオの導入は未だ過程にあることと、導入者は周囲の理解・協力を得ることと設計や運用の改善に孤軍奮闘していることがわかった。改善策として、導入担当者間で導入や運用への対処法を共有するなどして、効率よく導入を進めていくことなどが考えられる。

表 1. 導入の目的	延べ人数
学習者の学びの支援	14
学習者の学習指導のための情報収集	6
学習者の履修指導のための情報収集	5
学習者のキャリアパスの取得	3
科目の運営・管理	3
カリキュラムや科目の公開・管理・運営	2
授業の改善	1
組織評価のための情報収集	1

表 2. 記録する情報をどこから集めるか	延べ人数
学外での学習活動	8
複数の科目	7
教育機関全体	4
学習者の成績	4
一つの科目	3
研究科・学科のカリキュラム全体	3
シラバス	1

表 3. 記録する対象	延べ人数
授業での提出物(ペーパーテストや提出課題等)	11
学習者自身による学びの記録	11
学習者の振り返り記録	10
インフォーマルな学びの情報	7
インフォーマルな活動の情報	7
授業の成績や出席状況	5
学習に関わる全ての情報	2
授業内容の情報	2
授業での配布資料	2
シラバスに記載された情報	1

表 4. 振り返りの対象	延べ人数
学習者のあらゆる学び	5
1回ごとの授業	4
1科目ごと	4
複数科目を通して	4
カリキュラム全体	3

表 5. 公開の範囲	延べ人数
教員-学習者間で公開	10
使用者の任意	8
使用者間で公開	5
ショーケースとして任意の相手に公開	4
学内に公開	1
学外に公開	1
ショーケースとして学内に公開	1
非公開	1

表 6. その他、どのようにeポートフォリオに関わっているか、どのように導入しているかの自由記述(抜粋)

教育の目標や達成すべき到達点が明確ではないことが多く、ポートフォリオ自体の導入意義があやふやなものになりがちである。そのあたりに理解のある教職員でない場合は導入が難しいので、理解頂ける先生のみお使い頂き、無理やり広げることはしていない。

よく質保証や到達度の向上でポートフォリオがでてくるが、まだ、それらが結びつかない。学習の自己制御もしくは他者の支援を判断する材料にはなると思うが、周辺リソースやサービスが整備されないと有効ではない気がする。

ポートフォリオサイクルがうまく回れば、学習支援、キャリア支援、質保証などに有効なツールであると確信している。しかし、システムを導入しただけで、成果が出せる性質のものではない。教育に対する熱い想いを共有できる教員・職員たちと手を組んで、コツコツ積み上げていくしかない。全学利用の場合、目に見える成果を出すことは、簡単ではない。上層部や反対勢力(意味がないと思っている人たち)がしびれを切らす前に、成果を出す必要があるため、時間との戦いの部分もあり、効率よく導入が進められるといいなあと日々思っている。

学生や教員が過密なスケジュールの中で、適正な評価ができるように、簡素、効率的、かつコミュニケーションを喚起するツールになるように、技術担当者の支援を得て改修を繰り返している。その結果、管理的は複雑になってきたようで少し心配している。

周りの人達が独自のeポートフォリオ像を持っているので、毎回説明をして意識合わせをするのが大変だった。しかも担当者だった自分が異動した後の後任がICT・教育の素人だったので、動き出していたeポートフォリオの計画がほぼ破棄された。

現在、大学間連携GPで設計に関わっているが、学内外において、eポートフォリオの重要性が理解されていない、あるいは理解したくないのかもしれない。新しいシステムの導入は、仕事の負荷を高めるものとして警戒されているのかもしれない。

eポートフォリオの設計・開発・運用に携わっている。設計から開発まで少人数のグループで行い、運用の段階から関係者に説明、協力をお願いした。その際、ICTに対して苦手意識をもつ教員はマニュアルなどがあってもそのままでは運用が難しいなどの問題が発生したため、ICTスキルが低い人でも利用できるようにユーザーインターフェースの改良をしている。

当初、全学運用のためのeポートフォリオシステム導入と設計、運用プラン策定に関わっていたが、プロジェクト指導者(執行部)の交代によりメンバーから外れた。プロジェクト及びその指導者の指針・考えが一環していないプロジェクトは必ず失敗する。

輩出したい人材からのカリキュラム設計、授業内での能動的学習やリフレクションを促すような改善設計の改善が重要と思うが、一朝一夕には難しい。eポートフォリオの改善と、カリキュラムや授業設計の改善を、時間が多少かかっても相互に影響し合いながら地道に進めていくしか…。学生の学習状況をフィードバックしたティーチングポートフォリオのようなものが糸口かもと思う。